
緋弾のARIA ～未来に抗う武偵～

さまよう人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜未来に抗う武偵〜

【Nコード】

N2532S

【作者名】

さまよう人

【あらすじ】

幾多もの未来での、初めての【引き分け】
そこから始まる遠山キンジの物語

注意・原作を知らない人はネタバレが始めの方からあったりするの
で注意

ブログ 未来での最後の時（前書き）

幾多もの未来での、初めての【引き分け】

そこから始まる遠山キンジの物語

作者は文才がありません

ハーレム目指し、オリ主はいませんがオリキャラあり
これは勢いの小説で設定もちゃんと決まっています。

プロローグ 未来での最後の時

そこは、白と黒によって形成された空間

そして、そこには二人の男がいた。

片方は最強の武偵……………遠山キンジ

そして、もう片方は忘れられた超偵……………

【イブ】

「なあイブ……………俺は死んだのか？」

「いいえ、違います。あなたは【まだ】生きています。ですが、いつ死んでもおかしくありません」

「そうか……………くそ！俺は【アダム】に負けたにのか！」

「いいえ、それは違います」

「え？」

「長き【ループの中で】あなたは初めて【アダム】に引き分けたのです」

「ループの中で引き分けた？」

「はい。そして、その結果【アダム】は完成しました。【次の世界】

では必ず遠山キンジは負けます。そうすれば世界が終わります」

「世界が終わる？次の……世界？どうということだ？」

「見せましょう……この世界の真実の一端を……」
・【復元する世界^{ダ・カーボ}】」

【イブ】が呟くとその瞬間に頭の中に多くの過去の映像が流れ始めた。

「これは……あれ？俺はアダムと何百回と戦っている？……どうということだ……いや、そういことか……」

「さすが、HSS……いえ、ヒステリーモードと、言ったほうがいいですか、どちらにしろ、これだけで全てを理解出来る頭脳に感服します。何か質問はありますか？」

「なら、まず、【アダム】が【時間】を戻れる理由を教えてください。」

「【アダム】の力は【記録と読込】、そしてあなたが実際に経験した【物質操作能力】の二つです。」

「【記録と読込】？なんだそれは？」

「簡単です。よく、ゲームにあるセーブとロードのことです。これにより、【アダム】は自分が記録した時間と場所に飛べます。いつでも、どこからでも。ただ、セーブデータが一つだけですけどね。」

「なるほど、ならばその最後のセーブ時間がいつだ」

「あなたが【最後の事件】を解決した3日後です」

「【最後の事件】……あれか……」
・わかった。次の質問だ、なぜ【次の世界】で世界が滅びるんだ」

「簡単です。【アダム】が行おうとしていた【黄昏の变革】は世界が滅びるほどの力があり、もう【アダム】ではそれを制御できません。」

「【アダム】はそのことは？」

「気づいていません……いえ、出来ると信じているからこそ、考えもしていません」

「そうか、では、最後の質問だ。なぜ、そのことを、【初めて俺に話した】」

「あなたが【アダム】と引き分けたからです」

「なに？」

「あなたは今までの693回のループの全てで【アダム】を殺さずに捕まえてきました。故に【アダム】は力を使いあなたを【その時間】に置いて【過去】に飛んでいました。しかし、今回は違います。【アダム】は693回の敗北を糧にやっとあなたに一矢報いました。今回の経験で【アダム】はあなたより強くなりましたが、そのおかげであなたは可能性を手に入れた。」

「可能性？」

「はい、あなたは今【アダムにより瀕死の重傷である】という因果と【死際のヒステリーモード】という上位の因果があります。これと、私の能力【復元^{ダ・カーポ}する世界】が合わされば、あなたの心と記憶を過去に飛ばすことができます．．．．．私の超能力と引き換えに」

「!?!?．．．．．その言い方だと【次の世界】が正真正銘【最後の世界】になるんだな」

「はい、ですから、【勝った】ください。キンジさん」

「ああ、その依頼確かに聞き届けた」

「では、早速過去に送ります．．．．．【復元^{ダ・カーポ}する世界】」

【イブ】が呟くと足元に魔方陣のようなものが現れ、

地面に穴が開いた・・・
・・・「お約束」と言う【イブ】の声と共に
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・

ブログ 未来での最後の時（後書き）

勢いの投稿！

感想が痛烈なら止めるかも

感想に期待♪

第一弾 アリアとの邂逅（前書き）

取り敢えずほぼ原作通り

少しずつ変えていこう〜

会社が忙しい〜

第一弾 アリアとの邂逅

ここは武力を行使する探偵。通称【武偵^{ぶてい}】を育成する学校である【武偵校^{ぶていこう}】

その武偵校の敷地の中を一つの自転車が爆走していた。

「って、なんで気がついたらチャリジャックの真っ最中なんだよ！イブももう少し時間ずらして俺を飛ばせよ！」

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

・・・・・・・・・・・・・・・・この頭の悪そうな
声は横を走る拳銃を乗せたタイヤ付きの力カシみたいな乗物・・・
・・・・・・・・【セグウェイ】から聞こえてくる。

「チャリを 降りやがったり 減速 させやがると 爆発 しゃが
ります」

この時代に人気のポーカロイドノ声

「助けを 求めては いけません。ケータイを 使用した場合も
爆発 しゃがります」

本当に懐かしい。ここから始まったんだ。・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・俺の武偵としての人生が。
そして、大切な人達との歩みが

「減速を 確認しゃがりました 爆破しゃがりますよ」

（って、感傷に浸ってる場合じゃないな）

目線をセグウェイから女子寮の屋上の方に移す。

すると、そこにはたった今屋上から飛び降り、パラグライダーを開いた少女――アリアが映った。

「ほらそのバカ！さっさと頭下げなさいよ！」

バリバリバリバリッ！

今まで【世界郡】通り俺が頭を下げるよりも早く、問答無用でセグウェイを銃撃し、そのまま突っ込んでくる。

「危ね〜〜〜〜当たったら死ぬぞ」

が、そんなことは一切気にしないアリア

「そこのあんた！全力でこぎなさい！」

そして、そのまま一気に突っ込んでくるアリアにこちらからも突っ込み、すれ違いざまに抱きつく。

そして、

ドガアアアアアアアンツツツ！！！！

当たりが閃光と爆音に包まれ、そのまま体育倉庫にぶつか――

――

「な――」

らずに、ポケットのバタフライ・ナイフでパラグライダーの紐を切り、アリアの頭を胸に抱きしめ空中で意味も無く4回転し、その途中でこっちに向つていた7台の【UZIウージーを乗せたセグウェイ】目掛けて7発の銃弾を放つて破壊する。そして、体育倉庫の扉を蹴り破り跳び箱の裏に着地した。

それを間近で見ていたアリアは驚きを隠せない。

「あ、あんた一体何者」

「ふう〜そんなことより、これをどうぞお嬢さん」

呆然としてるアリアに俺は自分のベルトを外し、爆風でホックが壊れ下着が丸見えになっていたので、スカートを上げベルトを付けてあげる。

「んな、な、ななななにや」

（かわいいな〜アリア）

そういえば、どうして俺がヒスってるか気になる人もいるだろうから説明するとだな。

ぶつちやけ好きな子のお腹に顔を押し付け、なおかつ尚且つ下着なんか見えてしまつてはヒスらない方がおかしいよな……………
って、誰に説明してるんだろ？

「い、強姦魔！」

どうやら最終的に羞恥心から目をそらすためにそう言う結論に至つたようだ

「……………アリア。それは悲しい誤解だ」

俺は悲しそうにしながら、余計な一言を繋げる。

「高校生である俺が、小学生にセクハラ等するわけ無いじゃないか」

694 回分の記憶のおかげで遊び心を得た俺は、心に余裕があると巫山戯てしまふようになっていた。

「な！小学生……………こんな、こんな奴をわたしは……………こんな奴助けるんじゃないかった！」

ばぎゅぎゅん！

顔を伏せたかと思うと、すぐに足元に2発の弾丸を打ち込んできた。

「まで、すまない。小学生ではなく中学生だな。中学生は小学生と違って」

バンバンバンバンバン！

最後まで言う前に更に左右2発づつの弾丸が撃ち出される。

少し弄りすぎたかな？【今のアリア】には刺激が強すぎたようだ。

「わたしは高2だ！」

銃口を頭に合わせ撃とうとするアリアに一気に接近しその両腕を抑える。

「せい！」

しかし、アリアはそのまま俺を後方に合気道の要領で投げ飛ばし、背中の2本の刀を……………

「あれ？」

抜けなかった

「お探しの物はこれかな？」

二本の刀を地面に突き刺しながら聞く

「いつの間に！でも、それなら……………ってあれ？」

すぐに思考を切替、銃の弾倉を取り出そうとするが弾倉もないことに戸惑うアリア

「残念。弾倉もこつち」

バラバラと弾を撒き散らすと入れ物だけアリアに放り渡す。

「こ、この……………きゃあ！」

銃をしまい格闘を挑もうとしたアリアの足元に銃弾を蹴って転がし、アリアを転けさせる

その際に盛大にスカートがめくれて白い下着が見えた。

「白か……………つと、遊んでないで教室いかないとな」

「あ、あ、あああ、あんた、もう許さない！」

羞恥心で真っ赤になるアリアにそろそろヤバイと思った俺は周りの弾もアリアの周りに蹴り転がすと

「この卑怯者！でっかい風穴開けてやるんだからあ！」

アリアの決めゼリフを背中に受けながらその場を後にした。

第一弾 アリアとの邂逅（後書き）

最初は原作通りにいこうと思います

そして、裏理子をどれだけデレさせるか悩み中

アンケート・未来の話をたまに1話丸々使って出すか、ある程度進んだら一気に10話くらい使って出すかどっちが良いだろう？（アンケートとっても反映されるかは不明）

第二弾　ちょっとしたおちやめ（前書き）

各話のタイトルが思いつかね~~~~~
今回は眠い中書いたのでぐだぐだ

第二弾 ちょっとしたおちやめ

さて、簡単に今の俺の「ヒステリーモード」を説明しよう

昔のヒステリーモードは見境の無い力だった。だが、幾度の戦場を経て【最終階位】までたどり着いた今の俺の精神力ではたとえ体を交えても、ヒスことをその気になれば抑えることができるし、逆に側に女の子が居るか、携帯などで女の子の声が聴こえれば普通にヒスすることも出来る。

次に【階位】についてだ。

性的興奮が【第一階位】、死際しにぎわや嫉妬しつとのヒステリーモードなどが【第二階位】となり、その後にも特殊な階位が存在し、階位が上昇する毎にその能力は上昇する。

.....

「先生。あたしはあいつの隣座りたい」

クラス分けされた2年A組の最初のホームルームでアリアがやってのけた。さて、この後に待ち構えてる展開をどう弄いじれば面白くなるだろう。ワーーーーーっとと盛り上がる教室を見ながらいろいろと妄想する。

「よ.....良かったなキンジ！なんか知らんがお前にも春が来んだな！先生！オレ、転入生と席変わります！」

694回の記憶通りのセリフを全く同じテンションで同じタイミングで言う数少ない男友達の【武藤剛氣むつとうこうき】.....自分で

言っついてなんだが、ホント男友達いないな俺

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねえ。じゃあ武藤くん、席を変わってあげて」

わーわー。パチパチ

盛り上がるクラスと、空気が読めずに爆弾発言をしようとするアリア

1・止める

2・止めない
↑

2を選択しましたwww

「キンジ、これ、さっきのベルト」

アリアがベルトを投げ、俺がキャッチすると同時に

「理子分かった！分っちゃった！………これ、フラグばつきばきに立ってるよ！」

勢い良く立ち上がる【峰^{みね}・理子^{りこ}・リュパン】

「キーくん、ベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！これ、謎でしょ謎でしょ！？でも、理子には推理できた！できちゃった！」

ハイテンションの理子………さて、この顔が恥^{はじ}じらいで真っ赤にさせるための方法は決まった。
後は実行するだけ

・・・・・・・・・・・・・・・・やっちまったぜorz

「キンジ・・・・・・・・あんたはいつたい・・・・・・・・」

「キーくん・・・・・・・・」

「理子、もしもこの先困ったことがあれば俺に言えよ」

更に軽いヒステリーモードになって低い声で理子に囁やく

「え、えと、あ、ありがとう」

今の理子はこの俺に対する耐性が低いのでマジで赤くなる。

きーこーかーこーん、

そこで拍子抜けのチャイムが鳴りそのまま有耶無耶うやむやに授業に入った

当初と違う展開になってしまった。反省反省・・・・・・・・でも、後悔はしない！

そして、これからの展開を楽しみにしながら取り敢えず寝ることにする。

正直同じこの授業は695回目なので聞く気がしない・・・・・・・・..
お休み~~~~

第二弾 ちょっとしたおちやめ（後書き）

次回！追憶なり！過ぎ去ったの未来の話！
サブタイトル未定！

第三弾 追憶1【黄昏の色金】（前書き）

仕事のせいで時間が無い！！誰か助けて~~~~~
~~~~~

### 第三弾 追憶1【黄昏の色金】

これは夢だと俺はなぜか分かった。

そしてこれがイブの【復元する世界<sup>データボ</sup>】の副作用だと

これは最後の694回目の記憶

その中には些細な違いはあれど、根本的な違いは1つとして、なかった……694回目を除いて

最後の記憶……これはとても悲惨だった……

・大切な人達の傷ついた姿

激しい戦闘で原型を留めてない武偵校……その  
グラウンドの中央

血に塗れ<sup>まみ</sup>左足を折られた【アリア】……その胸に  
は緋色の光

白の巫女装束を真つ赤に染めた【白雪】……その胸  
には赤の光

能力を封じるために髪をズタズタにされ左腕を砕かれた【理子】……  
……その胸には黄色の光

ドラグノフごと腕を粉碎された【レキ】……そ  
の胸には藍色の光

カウンター封じのために両腕を潰された【あかり】……………  
……………その胸には白の光

デュランダルを砕かれ右肩にレイピアが刺さっている【ジャンヌ】  
……………その胸には水色の光

目に見える範囲にはいないが、この戦闘で重傷を負った【色金保持  
いろいろなほじ者達】……………その胸にはそれぞれの色の光

そして、俺とアダムの間には浮かぶ虹色に輝く【黄昏色金】  
タンガレイロカネ

「ふ、ふはははは！ ついに、ついにやったぞ！ 【黄昏の鍵】  
キー・オブ・ザ・トワイライトをついに創り上げたぞ！」

体中から血を流しながら歓喜の叫びをあげるアダム

「諦めるアダム。お前はここで俺に逮捕されて一生牢獄暮らしだ」

同じく血を多く流しながら電気ショックガンを構えるキンジ

「ああ、諦めるよ……この時間わね。でも、次は僕が勝つ、全ての色金保持者を潰して今度こそ貴様を絶望させてやるよ」

そう言いながら【黄昏色金】に歩み寄るアダムに対して俺もさり気なく近づく  
そして、

パリーーーーー！

突如としてガラスの割れるような音がした

「な！なんでここで【暦鏡】が！」

そう、そこには今まだ幾度となく見てきた色金の弾丸同士の衝突でのみ現れてきた過去に少しだけ介入できる空間の歪みが現れた

「【暦鏡】……そんな低俗な物ではない」

さも可笑しそうに笑うアダム

「これは【暦鏡】の原初たる【因果鏡】そして、これこそが【黄昏

の变革】のための……いや、ここにお前が  
いる時点で今更語る必要など無いか。どうせこの身体では何もできな  
いのだから」

タンガレイロカネ

【黄昏色金】を見た瞬間の高揚など無かったかのように諦めを宿し  
た声で語るアダム  
そして、

キーコーカーコーンキーコーカコーン~~~~~

チャイムと共に目が覚めた。ちょうど今日の授業が終わったようだ

次はアリアの襲撃……………じゃなくて来訪か……………  
……………ニヒッ

にじゅうせんに

### 第三弾 追憶1【黄昏の色金】（後書き）

感想に期待♪

次回は白雪登場！かも？カナ？カナ？

そしてレキを早く出したい！

最後にゴメンナサイ。少し書き方がおかしいですね  
そして短いですね・・・・・・・・でも時間が無いんです！許して！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2532s/>

---

緋弾のARIA～未来に抗う武偵～

2011年5月13日17時09分発行